

主題とのつながりを考えながら文章を構成したり、言葉を吟味したりする子どもの育成
～「イメージマップを用いた発想指導」と「教材文提示による構想指導」～

柏崎市立鯖石小学校
教諭 小湊 雄一

I 目指す子どもの姿

グローバル化は我々の社会に多様性をもたらし、また、急速な情報化や技術革新は人間生活を質的にも変化させつつある。将来の変化を予測することが難しい時代だからこそ、答えのない問題に対して自分なりに考え、解決していく力が大切になってくると考える。

教育課程企画特別部会の論点整理（平成27）ではⁱ、現行学習指導要領における国語科教育が一定の成果を挙げていると述べる一方で、「伝えたい内容を明確にして表現したり、文章の内容や形式等を正確に理解したりすることなどについては、更なる充実が求められるところである。」と指摘している。表現する力、理解する力をこれまで以上に育むことが求められているのである。

しかし、あらゆる思考力を支えているのは、感性や情緒であるということをお忘れてはならない。細田（平成19）はⁱⁱ、「人間の論理の中心には情緒力があります。わかりやすく言えば感情です。世の中の様々な出来事をみて判断する時に、根本には自分の感情が大きくかかわっています。」と述べ、情緒力を鍛えることが生き方を考えることにかかわると指摘している。論理的に考える力を高めるためには、その土台となる、感情や想像を言葉にする力を大切にしなければならないのである。

こうした視点から自らの「書くこと」の実践を省みると、表現方法（形式）の指導に重きを置きすぎることがあまり内容面での高まりが不十分な実践が少なくなかった。感性や思考力を育むためには訴えたいこと（主題）をより明確にしてから書かせる必要がある。

主題を明確にして書いていく中で「主題をより効果的に伝えるためには、どのように書いたらよいのだろうか？」と問題意識をもつだろう。子どもが表現方法に問題意識をもってきた状況を的確に見取り、教材文を提示して構成や記述の仕方を具体的に指導する。このことにより、子どもは主題とのつながりを意識しながら文章構成や記述の仕方を学ぶことができると思う。こ

以上の理由から「主題とのつながりを考えながら文章を組み立てたり、言葉を吟味したりする子ども」を育てたいと考え、本研究主題を設定した。

II 具体的な手立て

1 身に付けさせたい力を明確にしたうえで、効果的な言語活動を設定する

単元で子どもに身に付けさせたい力を明確にする。学習指導要領と教科書教材を照らし合わせながら教材研究するとともに、教師自ら文章を書いてみることにより、その言語活動で子どもがつまずきそうなところはどこか、どのような問題意識をもってくるかなどを具体的に想定する。そのうえで、身に付けさせたい力をより効果的に指導できる言語活動を設定する。初等教育資料や言語活動事例集などを手掛かりにして、より効果的な言語活動の在り方を探る。

2 イメージマップなどを活用して発想を広げさせ、主題を明確化させる

文章を書かせる前に、題材にかかわる自分の思いや事実などをイメージマップに書かせる。発想を広げさせながら、本当に書きたいことは何なのかを考えさせる。

3 表現方法に問題意識をもってきた状況で教材文を提示し、具体的に指導する

主題が明確になってから、実際に文章を書かせていく。その中で、子どもは「主題を効果的に表すには、どのように書いたらよいのだろうか？」と問題意識をもってくるだろう。子どもが表現方法に問題意識をもってきた状況を的確に見取りながら、教材文を提示し、具体的に指導する。

III 実践の概要

1 単元の概要

(1) 単元名 「読む人によりよく伝わるように (随筆)」(光村図書 6 年)

(2) 単元目標

東京修学旅行を題材にした随筆を書く活動を通して、読む人によりよく伝わるようにするためには起承転結の構成や一つ一つの叙述を工夫することが大切だと理解し、思いがよりよく伝わる随筆を書くことができる。【書くこと イ・ウ】

(3) 子どもの実態 (6 年生：男子 9 名、女子 3 名、計 12 名)

4 月から日々の出来事を一言日記に表す活動を続けている。随筆を書く活動に取り組むのは初めてである。読み手によりよく伝わるように構成を工夫したり、叙述を工夫したりすることには弱さが見られる。本単元では、随筆という文章様式に出会う。これまで書いてきた一言日記(生活文)を発展させたい。読み手を意識しながら自分の文章、言葉、一字一句に心をこめて考え抜く姿を求めたい。

(4) 単元の追求構想 (全 8 時間 本時 4/8)

次	子どもの追求 (□) と主な働きかけ (○)	*備考◆評価
醸成	○実際に修学旅行に出かけ、経験したことをメモさせる。	
第 1 次 ① ②	○イメージマップを書かせる。(発想) ○教材文 A (日記)・B (随筆) を提示し、見通しをもたせる。 ○随筆を書く目的を教える。文集にまとめることを提案する 日記と比べると、随筆は自分のことを詳しく書いていて、読んだ人が想像しやすい。難しそうだけど、学級の仲間によりよく伝わるようにがんばって書きたい。	◆随筆を書く意欲を高めている(発言、振り返り)
第 2 次 ③前時 ④本時 ⑤ ⑥ ⑦	◎組み立てを考えよう(構想) *起承転結について教える ◎題名を考えよう。 ◎書き出しを考えよう。 ☆読み手の心をひきつけるには、どのように書くとよいか? 「会話」や「自分の考えや感想」から書き始めると、読む人に「なんのことだろう」「その先が知りたいな」と思わせる効果があるんだな。この工夫を取り入れて書き出そう。 ◎「承」「転」「結」を考えよう。 ○推敲させる。 ○下書きをもとに清書させる。	◆起承転結に沿って文章の組み立てを考えている(ノート) ◆読み手を引き付ける工夫を取り入れて書いている(記述)
第 3 次 ⑧	○清書したものを印刷、製本する。 ○仲間の作品を読み合い、コメントを書かせる。 ○学習のまとめを書かせる。	◆自分の言葉で学習のまとめを書く

2 授業の実際

(1) 身に付けさせたい力を明確にしたうえで、効果的な言語活動を設定する

本単元では「起承転結で文章を構成する力」「読み手を引き付ける言葉を考える力」を身に付けさせたいと考えた。自分の考えを明確にするだけでなく、読み手によりよく伝わるように構成を工夫し、叙述を工夫する姿を求めた。

そのために東京修学旅行を題材とした随筆を書き、学級文集をつくる言語活動を設定した。書いた作品は文集にまとめ、学級の仲間と読み合うことを伝えた。「学級の仲間によりよく伝わるように工夫を取り入れて書こう」と相手意識・目的意識を高める姿が見られた一方で、随筆を書くことに不安感を抱いている様子もあった。

そこで、右の「随筆についての説明資料」を用いて随筆を書く意義や大切にしたいことを教えた。

随筆についての説明資料

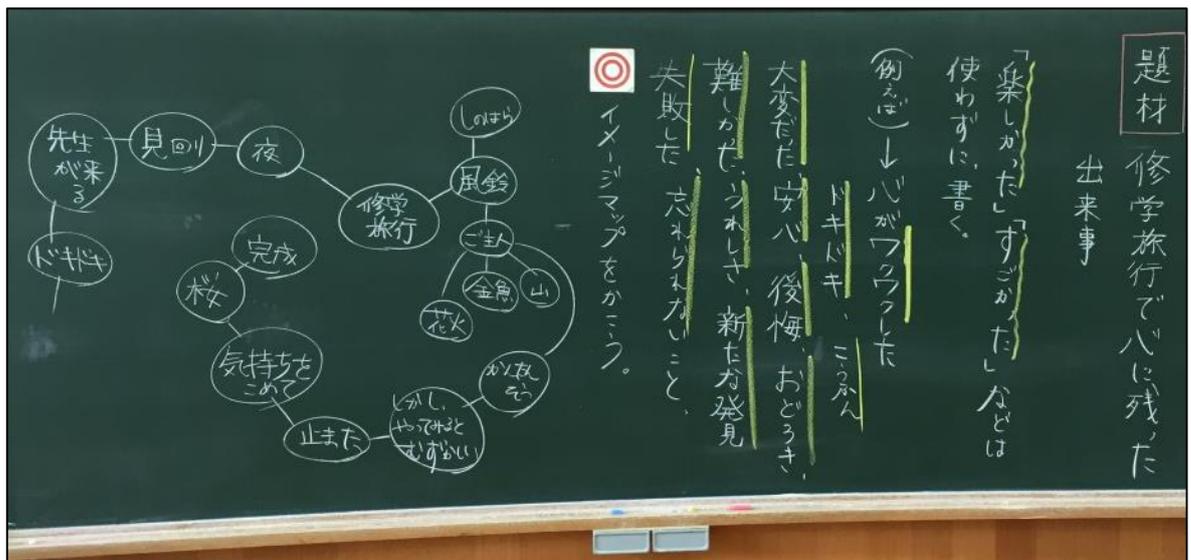
随筆とは
身近な事物や出来事を題材として、それに対する筆者のものの見方や考え方、感じ方などを書いた文章を随筆という。

随筆を書く意義
随筆を書くことで、出来事や経験などをきつかけに、自分自身がつまみつけたり深めたりするものが見方や考え方、生き方などを見つめ直したり深めたりすることができる。

随筆を書くうえで大切にしたいこと
どのような体験をして、そこからどのようなことを感じたり、考えたりしたかを自分の言葉で表現する。「楽しかった」「面白かった」「嬉しかった」などは使わない。それ以外の言葉で表現する。文章はなるべく短く。詳しく、深く、掘り下げよう。

(2) イメージマップなどを利用して発想を広げさせ、主題を明確化させる

修学旅行の思い出を題材にして、イメージマップに書かせた。「驚いた」「悩んだ」「感動した」などの視点から具体的な場面を想起させた。発想を十分に広げさせることを大切にした。



(3) 表現方法に問題意識をもってきた状況で教材文を提示し、具体的に指導する

①主題と構成とのつながり

述べ方に意識が向いてきた状況で、教材文Aと教材文Bを提示した。(自作)

教材文A
心に残った風鈴づくり
小潟 雄一
修学旅行で心に残ったのは風鈴づくりです。
浅草にある風鈴屋さんで、風鈴をつくりました。五・六年生のみんなでやりました。風鈴屋さんの御主人がお手本を見せてくれました。いろんなデザインを見せられました。絵の具もたくさんありました。とてもすごかったです。説明が終わってから、自分の風鈴をつくりました。紙に絵の具をとりました。筆を使ってかきました。間違っただときはティッシュを使って消しました。
私は上手にかけるようにがんばりました。難しかったけど、うまくできてよかったです。出まわりました。お店の人が箱に入れてくれました。他の人の風鈴も上手にできていてすごかったです。また機会があったらやってみたいです。
初めてやってみただけど、上手にできたので風鈴づくりをやったよかったです。

教材文B
技術よりも気持ち
小潟 雄一
風鈴が風に揺れている。修学旅行の二日目。下町弟子入り体験をするために浅草に向かった。風鈴づくりに挑戦する。全員の席につくと、御主人が説明を始めた。風鈴に絵をつけていく。花火、富士山、花。色とりどりの絵具を使い、手本を見せてくれた。真似すれば簡単にできそう。そう思った。いやいよ実際に絵をつけていく。緑、白、赤。気に入った絵の具を手元に寄せた。風鈴の内側に白色を少しだけ塗った。しかし、止まった。上手くかきたいのだが、思うようにいかない。私は悩んだ。そんな時、御主人がおっしゃった。「気持ちが入っているかどうか大切だよ。」と。技術ではない。気持ちだ。見た目が気にならなくていい。自分の気持ちを入れて、花びらを描いた。この風鈴を妻に贈ろうと決めて。

「同じ題材を取り上げているのに、AよりもBの方が読み手によりよく伝わる」「言葉一つ一つを選んでいる」など、子どもは随筆の価値に気付くことができた。教材文B（随筆）は起承転結で構成した。それぞれ以下の要素を含んでいる。

起…書き出し。読み手の心を引き付ける。さりげなく書き出す。
承…A（最初はこう思っていた）。自分の考え。転につながるように。
転…A（こう変わった）。変化した考え。読み手にあっと思わせる展開。
結…結論。つまり、こういうことが言いたい。

結	転	承	起
事、東京へ来た。また来た。一面を見た。	。東京の場所。木造の場所。な場所。面をみた。	。都会的な。思った。	。初め。私の胸を高く見ると。ここは。
。東京へ来た。また来た。一面を見た。	。東京の場所。木造の場所。な場所。面をみた。	。都会的な。思った。	。初め。私の胸を高く見ると。ここは。

この構成に沿って、文章の組み立てを考えさせた。A子は「東京への見方が変わり、もう一度行きたいと思うようになった」という主題とつなげて、「テレビでよく見るところばかり」から、「違う町に来るたびに雰囲気ガラッと変わる」と展開させようと考えてきた。十分とは言えないが、主題と構成とをつなげて考えていることがわかる。

②主題と記述とのつながり

主題と記述とのつながりをより効果的に考えさせるために、「起（書き出し）」だけを考えさせた。一文に限定することで、自分の思いをどのような言葉で表現するとよいかについて吟味しやすくなるからである。子どもが問いをもってきた状況で教材文C（自作）を提示し、読み手の心をひきつける書き出しについて検討させた。

<p>⑥ 私の決断 これをのがしたら、後悔するだろうな。以前の私は、それほどものにこだわりがなかった。</p> <p>竹内 百合子</p>	<p>⑤ 祭り こんなはずじゃなかったのに。家を出るとき、右手には五枚の百円玉をにぎりしめていた。</p> <p>原田 尚</p>	<p>④ 電車の中の「わたし」 どこかで、カラン、カランと音がしていた。先月のある日曜日、わたしは祖父の家に行くために一人で電車に乗っていた。</p> <p>中山みなみ</p>	<p>③ 空から見た我が家 まるで豆つぶのように見えた。高校二年生の夏、私は生まれて初めて飛行機に乗った。</p> <p>和田 望</p>	<p>② 夜明け 「そろそろ時間だ。」 布団の中で私はつぶやいた。時計の針は四時を回ったところだった。</p> <p>五十嵐 洋</p>	<p>教材文C ① 峠 「思っていたよりも長かったね。」 自転車を降りると、二人は顔を見合わせて言った。登ってきた山道を振り返る。</p> <p>桑原 勇</p>
---	---	--	---	--	---

「音から書き出すと、何の音なのかが気になって読みたくなる。」「思ったことから書き出すと、どうしてそう思ったのかが気になって続きが読みたくなる。」など、子どもは教材文Cを手掛かりにして書き出しの工夫を明らかにした。

次に自分の書き出しを考えさせ、相互評価をさせた。しかし、追求が停滞した。これは相互評価の基準が曖昧だったことに起因する。主題と記述（あるいは構成も含めて）のつながりは思考していたが、不十分だったと考える。

単元週末には随筆集として製本し、最後に学級全員で読み合った。達成感をもって単元を終えた。



完成したA子の作品「新たな東京の一面」

VI 研究のまとめ

自分なりに文章を書き上げて満足する傾向があった子どもが、読み手を意識しながら言葉を吟味しようとする姿が見られた。書きたいことを膨らませ、自分なりの言葉で随筆を書き上げることができたのは子どもにとっての成長である。イメージマップを用いて発想を広げさせたことにより、自分が書きたいことをはっきりさせることができた。

しかし、思考の深まりという面では不十分だった。主題と構想とのつながりを検討させる働き掛けが弱かったためである。訴えたいこと（主題）がより伝わる文章構成を目指して子ども自身が思考していく学びを具現したい。そのためには、主題の明確化を促す手立てを改善するとともに、主題と構想とのつながりを考えさせる発問や教材を研究していく必要がある。

i 教育課程企画特別部会「論点整理」（平成27年）

ii 細田和彦「国語科教育ノート」（平成19年）